

日本重複障害教育研究会の歩みと今後（その1）

2010. 11. 14 会長 佐藤邦男・著

※2011年以降は事務局により追加

【初代 橋本会長、2代目 竹内会長】

昭和 44 (1969)年	4月 17日	○発起人：故・竹内光春氏(当時桐が丘養)の呼びかけに応じた 30 余名の養護学校の教員で脳性マヒ教育研究会を結成(事務局桐が丘養)	
	7月 1日	○「脳性マヒ児の教育」創刊〔発行〕 ※創刊にあたって一教育現場の現場人による現場のための研究活動の場を提供し、脳性マヒ教育の開発と進展に寄与することをねらいとする一同人代表：竹内光春 ※誰でも同人として参加でき、執筆規定に従って応募下さい。授業研究・学習指導・生活指導・行事などの実践、特に重複障害児へのアプローチを歓迎します。 ※発刊の背景—これまで肢体不自由校に入学していたポリオ、先股脱、結核性骨関節炎、カリエスの子どもたちには予防ワクチン、早期発見早期治療、公衆衛生の確立で激減、昭和40年頃より脳性マヒ児が主流となってきた。その多くは重度・重複障害児として教育困難な中に組み込まれ就学猶予・免除の対象とされてきたが、各校に特別クラス、観察学級などの試行が進められ、学習が模索されていった。定員制で選考試験があった養護学校に入れなかった子どもたちの区立学級(ひまわり、わかたけ学級)の開設もあり、重い脳性マヒ児の指導の見直しが始まってきた。そして視知覚面(知的運動学習も含む)からのアプローチ、機能訓練面と(心理的リハビリテーションも含)からのアプローチなど子どもの学ぶ力、可能性の追究が進められ、苦慮と交流があった。	
昭和 44 (1969)年	11月 1日	○「脳性マヒ児の教育」第2号発行 (印刷：日本アビリティーズ協会)	
昭和 45 (1970)年	2月 15日	○「脳性マヒ児の教育」第3号発行	
昭和 45 (1970)年	9月 1日	○「脳性マヒ児の教育」第5号発行 「教育に下限はあるか」特集—重度重複障害教育の視点に立つ 以降毎号特集を組み、現場の悩み、時代の要請に応える方式をとった。 当時の特集の1~2例「子どもにとって訓練とは」「教科の原点を求めて—知覚・運動障害」	※昭和45年2月 日本肢体不自由教育研究会が「肢体不自由教育」創刊 ※昭和44年学習指導要領改訂(養護学校要領は46年告示)—養護・訓練導入、重複障害児の特例

		<p>「遊びと心身の発達」「全員就学と重度・重複障害児教育」等々 尚、紙面には実践講座, シリーズ(時の話題)ルポ, 図書紹介, 学校紹介, グラビアなども盛り込む。</p> <p>※同人数の推移 昭44-92名, 昭47-128名, 昭-145名 購読者含めて700余名</p>	設置
昭和48 (1973)年	12月	○研究同人から会員制にきりかえ発行業務を日本アビリティーズ協会に委託(No.13)年会費を1600円とする。	※昭和49(1974)年4月東京都希望者全員就学
昭和51 (1976)年	6月	○研究会組織再編成 会長:橋本重治氏 代表幹事:竹内光春 評議員石部氏他8名 幹事(地方ブロック含)22名 編集スタッフ10名と改組, 編集・運営を全国規模に進めた。	
昭和53 (1978)年	8月23日 ~24日	○脳性マヒ児教育講座実施ー 渋谷区身障福祉会館 季刊誌の「理論と実践」を自分の目で確かめたい機会を設けてほしい要望にこたえ夏休み2日間年1回開催することにした。 第1回特別講義 五味重春氏 他脳性マヒ児の学習理論・動作・言語知覚の理論と実技 第2回特別講義 成瀬悟策氏(1979年8月都障害者福祉会館) 以降第33回(2010年)まで継続実施(基調講演とコース制をとる) 最近では医ケア, 訓練(ボバース, 静的弛緩誘導法)知覚運動学習, リズム運動療法, 音楽療法, 摂食・学習障害などをコース別にして実施。 会場はジプシーのように転々としたが(国立オリンピック記念青少年センター, 都スポーツセンター, 横浜技能文化会館, 東京成徳短大, 東京家政大学, 淑徳短期大学等)理解をいただき会場を借用してきた。	※養護学校義務制施行 〔昭和54(1979)年4月〕

教育講座受講生(推移)

1~5回	100名前後	※コース制なし
18~29回	209~294名	※4~5コース キャンセル待ちが出たほど

		※受講料会員 16000 円 一般 18000 円
30 回	136 名	
31 回	151 名	※受講料 10000 円
32 回	164 名 (内特別聴講生 19 名) 実質 145 名	※受講料 10000 円
33 回	132 名 (内特別聴講生 17 名) 実質 115 名	※受講料 10000 円

昭和 58 (1983) 年	11 月 27 日	○50 号記念号発行 (購読者数 2600 名、発行 3000 部) 特集「改めて養護学校の教育を考える」 義務制施行に向け盲ろう養学習指導要領を一本化した昭和 52 年学習指導要領(完全実施・昭 56)でゆとり教育, 訪問教育, 重度重複障害児に対する養護・訓練を主とした指導の特例などを受け, 現場の悩みに応えたもの	
平成元 (1989) 年		○新会長竹内光春氏就任 橋本先生ご高齢のため勇退 代表幹事に斎藤秀元氏 ※学習指導要領改訂(1989 年 10 月) 幼稚部教育要項小中高と一貫化, 生活科導入, 教育機器パソコン導入など進む	
平成 2 (1990) 年		○研究会名を「日本重複障害教育研究会」と改め, 重複した障害のある子どもの教育が世紀の終末的なイメージでなく新世紀への期待とともに歩むこととしたら, どうあったらよいか, どのような価値ある変化を必要とするか誌面を通して探り続けたい(竹内氏のあいさつ) ○更にノーマライゼーションにつながるほんものの教育を求めてほしい(伊藤隆二氏の文より) ○誌名「養護学校の教育と展望」に改題(第 77 号誌より)	
平成 5 (1993) 年		○研究会独立 日本アビリティーズ協会に頼り切ってきた企画・編集・営業事務を研究会にもどし自主独立する。事務局竹内会長宅, 印刷を三美印刷 KK に委託。	※通級による指導制度化, 全面施行となり発達障害児への指導に焦点があてられはじめた。
平成 8 (1996) 年	2 月	○100 号記念誌発行 21 世紀を目指して「養護学校教育の先駆的課題」と銘打ち, 統合教育, 医療ケアの今後について特集, 更に自立活動, 高等部訪問教育導入	

	4月25日	<p>○100号記念会：KKR ホテル TOKYO(旧竹橋会館) 評議員、執筆者、講師100名余招待</p> <p>○101号・102号の発行 発行部数101号-3000部, 102号-3300部にのぼる</p>	※平成10年学習指導要領改訂週5日制完全実施
平成11(1999)年～ 平成19(2007)年まで		<p>○新事業「教育研究奨励賞」公募 本誌掲載の教育実践研究・公募された論文を対象にヒット賞(実践研究・臨床研究)及びほっと賞(教育実践記録)を選び、講座開講式にて表彰した。乳腺論文は本誌に掲載, 入選5万円, 佳作3万円(毎年)</p> <p>○新事業「いきいき活動助成」 障害児の教育・療育にかかわる民間の個人または団体の研究、実践活動の資金助成1件10万円以下 助成例: 親と子の音楽療法, 乗馬体験交流など毎年申請・審査を経て支給</p>	
平成13 (2001)年		○NPO 法人日本アビリティーズ協会の傘下に入り、支援教育事業部日本重複障害教育研究会となる。事務局主任として深野鉞氏を迎える(編集委員から)(ホームページ相談コーナー設ける)	
		<p>○新事務所に移る: 豊島区南池袋1-1-9-602(シャトーレ玉川ビル6F) 本格的に企業経営をめざす</p> <p>○グラビア写真家星川ひろ子氏に依頼, 以降毎号に暖かいコメント一緒に掲載 (No. 125)</p>	※文部省「21世紀の特殊教育のあり方を特別支援教育と位置付ける」答申, 2003年本格実施
平成16 (2004)年	11月3日	<p>○竹内光春会長前立腺がんのため急逝 3年前発覚以来治療を続けられていましたが、痛みをこらえ夏の講座でリズム運動療法の講義, 実技指導を担い, 率先して会務を進められた。大黒柱を失い全員茫然自失の状態であった。 (11月4日～5日横浜聖書パプテスト教会で葬儀式・No. 136に追悼文掲載・平成17(2005)年11月3日偲ぶ会開催)</p>	